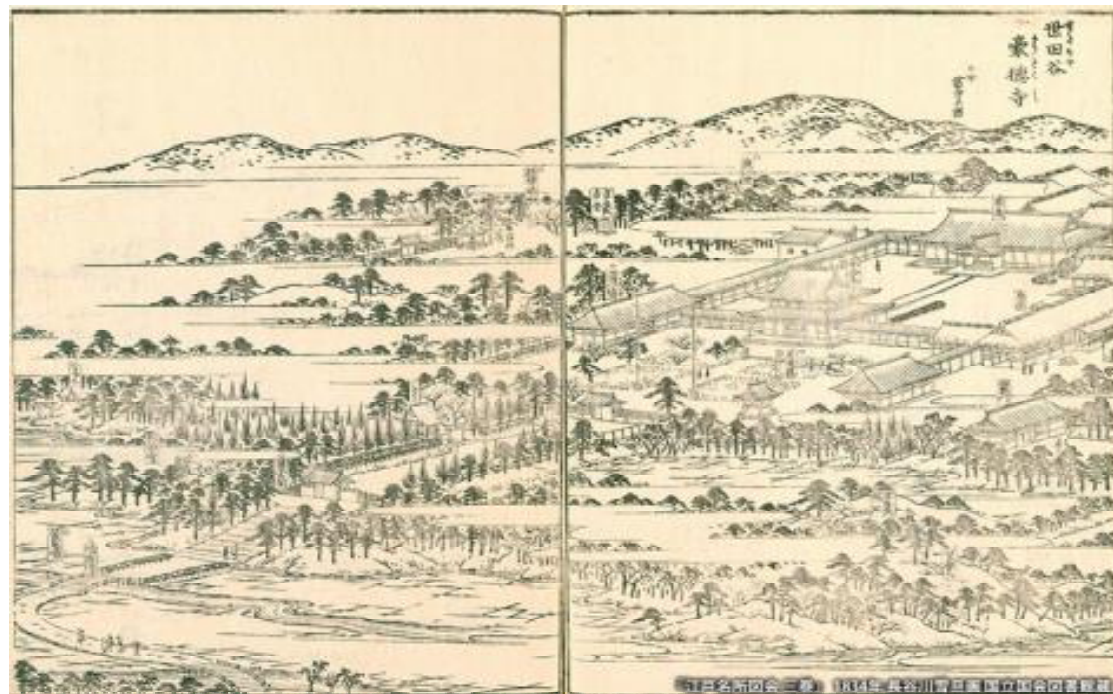


春の世田谷を歩く

—豪徳寺から松陰神社へ—



「江戸名所図会」

【日時】2024年5月12日（日）（雨天順延 5月26日<日>）

*実施の問い合わせは当日午前6～7時に下記の電話へ

【集合】小田急線豪徳寺駅改札前 午前10時

*豪徳寺駅には各駅停車しか停まりません。注意してください。豪徳寺駅の改札は一つしかありません。

【ルート】小田急線豪徳寺駅→旧尾崎テオドラ邸（外観のみ）→豪徳寺（仏殿、井伊直弼墓、招福殿など）→勝光院（吉良氏墓所）→世田谷城跡（世田谷城址公園、昼食）→世田谷代官屋敷・世田谷区立郷土資料館→ボロ市通り→円光院→国土舘大学→桂太郎墓→松陰神社（松下村塾復元、吉田松陰墓など）→東急世田谷線松陰神社前駅<解散>

*歩く距離は4キロぐらいです。解散後は世田谷線で東急田園都市線、小田急線、京王線などに出られます)

【参加費】1,000円（資料代、保険代）

【昼食】昼食（弁当）は各自でご持参下さい。 【解散】午後3時頃

「春の世田谷を歩く」・本日のコース

【集合】2024年5月12日（日）（雨天順延 5月26日）

【コース】

| | |
|---------------------|------------------------------------|
| 小田急線豪徳寺駅 | 円光院 |
| ↓ | ↓ |
| 旧尾崎テオドラ邸（外観のみ） | 国土舘大学 |
| ↓ | ↓ |
| 豪徳寺（仏殿、井伊直弼墓、招福殿など） | 桂太郎墓 |
| ↓ | ↓ |
| 勝光院（吉良氏墓所） | 松陰神社（松下村塾復元、吉田松陰墓など） |
| ↓ | ↓ |
| 世田谷城跡（世田谷城址公園、昼食） | 東急世田谷線松陰神社前駅<解散> |
| ↓ | *歩く距離は4キロぐらいです。 |
| 世田谷代官屋敷・世田谷区立郷土資料館 | 解散後は世田谷線で東急田園都市線、小田急線、京王線などに出られます) |
| ↓ | |
| ボロ市通り | |
| ↓ | |

*本日の終了予定時間は午後3時頃ですが、場合によってはもう少し時間がかかることがあります。

*途中、車の交通などで危険な箇所がありますので、前後の交通に注意し、なるべく一列になるようにご協力ください。

*一番後方にも係員がつきますので、自分の速さで歩いて一日の行程を楽しんでください。

*その他、わからないことがありましたら、青い腕章をつけた係員に申し出てください。

関係地図

【解説】

14世紀後半、世田谷は吉良氏が領地を支配していた。吉良氏は、現在の世田谷城址公園や豪徳寺の一带に館を構え、矢倉沢往還を望む場所に拠点となる城を置いた。16世紀、吉良氏が後北条氏の支配下に入ると、後北条氏により矢倉沢往還沿いに世田谷新宿が設けられ楽市が開かれた。これが世田谷のボロ市の起源である。

江戸時代になり、世田谷の村の約半数は彦根藩主井伊家の領地となり、代官となった大場家が藩領の代官となった。井伊家は、世田谷村の寺を菩提寺とし、江戸でなくなった藩主の墓所が造つられた。

◇ペリー来航と世田谷

嘉永6（1853）年6月3日、ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀に来航し、日本の開国・通商を要求した。江戸湾警備の任にあっていた彦根藩をはじめとする会津・川越・忍の四藩は、多くの藩士・領民を動員して警備にあたった。彦根藩世田谷領に対しても、御用荷物輸送のための人馬の動員が命じられた。彦根藩井伊家領世田谷20ヶ村から、人足160人・馬35匹が、ついで人足500人が徴発された。

翌年1月11日、ペリーは再び浦賀に来航し、前回の来航の時よりも強硬な態度を示し、艦隊を神奈川沖に停泊させて幕府の回答をせまった。彦根藩は江戸湾の内海警備の任にあつたので、またも世田谷領20ヶ村に対して人馬の徴発を命じた。人足168人、馬30匹が動員され、ついで人足509人、馬36が動員されている。これらの動員は、世田谷領の村々にとっては重い負担であつたので、村々からその免除を願い出る嘆願書が提出された。

◇条約調印問題と井伊直弼

同じ年の3月3日、幕府は日米和親条約を締結し、下田・箱館の2港を開いた。さらに安政4（1857）年10月には、前年に来航した米国駐日総領事ハリスが江戸に来て、将軍家定に国書を提出し、さらに老中堀田正睦を訪ねて世界の大勢を説いて通商条約の締結をすすめた。12月になると堀田幕閣は、それについて諸大名に諮問した。幕府の方針は、通商条約に調印して貿易を開始することもやむなしというものであつた。諸大名の条約調印についての意見は、ハリスの要求を拒否せよとの意見もあつたが、幕府の方針をやむを得ぬと承認する大名が多かつた。条約談判ののち条約の内容が決まつたが、調印については朝廷との折衝が課題となつた。堀田は2月に自ら上京して懸命に勅許の獲得に努力したものの、ついに朝廷からは勅許を得ることはできなかった。

堀田が京都から帰った3日後の4月23日、彦根藩主井伊直弼が大老に就任した。直弼は大老に就任すると、これまで問題となつてきた将軍の後継者に徳川慶福を決定した。13代将軍家定の後継者としては、家定の従兄弟で紀州藩主の徳川慶福と徳川斉昭の子である徳川慶喜の二人があげられていた。慶福を支持していたのは、南紀派と呼ばれる井伊直弼ら譜代の有力大名たち

であり、慶喜を支持していた一橋派と呼ばれる越前藩主松平慶永らと対立していた。ついで直弼は懸案である通商条約を締結する決意を固め、6月に勅許を待たずに条約に調印したのであつた。

◇安政の大獄と吉田松陰

この条約調印については、朝廷側や一橋派の大名の不満が激しく、非難は直弼一身に集中した。また在京の志士・浪人たちも幕府に反対する動きをみせていた。直弼はこうした反対派の動きに弾圧を加え、斉昭・慶喜父子をはじめ一橋派の大名を永蟄居・隠居謹慎などに処した。また反対派の志士である梅田雲浜の逮捕を手始めに橋本左内・頼三樹三郎・吉田松陰らを一齐に検挙するという、いわゆる安政の大獄を引き起こした。

吉田松陰は、長州藩の下級武士の家に生まれ、兵学を学び江戸・長崎に遊学し、世界情勢についての認識を深め、日本の前途について憂えるようになった。最初のペリー来航の時には、浦賀へその様子を偵察に行っている。また再来したペリーの船で米国への渡航を企てたが失敗し、3年の獄中生活を送ることになる。出獄後、彼は松下村塾を主宰し、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤俊輔（博文）・山県小助（有朋）ら、長州藩尊王攘夷運動・倒幕運動の指導者、そして後に明治政府において長州藩閥の中樞をなす人物を育てた。しかし松陰は、次第にその主張を精鋭化させ、多くの弟子は距離を置くようになる。安政5年12月、老中間部詮勝の襲撃を企てたとして幕府に捕らえられ、翌年に処刑されてしまう。

こうした大獄の断行は、かえって反対派を刺激した。万延元（1860）年3月3日、直弼は桜田門外において水戸浪士を中心とする18人の集団に襲われ暗殺されてしまう。いわゆる桜田門外の変である。

本日の最後の見学地が松陰神社である。ここ江戸時代に若林村と呼ばれ、長州藩毛利家の抱え屋敷があり、「大夫山」（だいぶやま）などとよばれていた。ここに松陰の墓が造られ、その後神社が置かれるようになった。弾圧の主導者とその犠牲者が隣あわせの地に眠っているのも、歴史の皮肉と言えるのではないだろうか。

見学ポイントの解説

◆◆旧尾崎テオドラ邸◆◆

明治21（1888）年、尾崎三良（三条実美家士、大政奉還後の官制案作成、貴族院議員、宮中顧問官など歴任）が長女英子・セオドラのために港区に建てた洋館。下見板コロニアル形式。1933（昭和8）年に現在の場所に移築。2019年、開発で取り壊しのプランが浮上したが、漫画家の山下和美、笹生那実・新田たつお夫妻らの協力を得、一社旧尾崎邸保存プロジェクトを設立し、土地建物を取得した。他の漫画家の支援、クラウドファンディングの実施で資金を集め修復し、ギャラリー、喫茶室として2024年3月1日にオープンした。

* 尾崎セオドラ英子（Yei Theodora Ozaki, 1870～1932）

明治21（1888）年、尾崎三良が英国留学中に結婚したバサイア・キャサリン・モリソンとの間に生まれた三人の娘の長女。三良の帰国後生活に窮したバサイア母子は16歳のセオドラを日本に送る。英語教師や英国公使夫人の個人秘書などを務めたのち、再び渡欧。英国の母の元に戻るが生活に困窮し、福沢諭吉により慶応義塾幼稚舎の英語教師として再来日（1899）。タイムズ記者。翻訳家。代表作巖谷小波のお伽噺『Japanese Fairy Tales』（Project Gutenbergで閲覧可能）。1905年、尾崎行雄と結婚。同姓の尾崎行雄家と間違えられたため、知り合ったと言われている。



* 尾崎行雄（1858（安政5）～1954（昭和29）年）

「憲政の神様」。明治23（1890）年の第1回衆議院議員総選挙以後、63年間連続25回当選。その間に文相、司法相などを歴任。明治36（1903）年から同45（1912）年まで東京市長（ポトマックの桜）。

* 相馬雪香（1912年～2008年）

尾崎行雄の三女。セオドラ英子の娘。1979年、インドシナ難民救済のために「難民を助ける会」（AAR Japan）を設立。対人地雷廃絶に向けた活動、子供や障害者への援助などを行う。1997年、地雷禁止国際キャンペーンがノーベル平和賞受賞。「日本のNGOのパイオニア」。

◆◆豪徳寺◆◆

豪徳寺は曹洞宗の古刹で、山号を大谿山だいけいざんという。元は文明12年（1480）に

世田谷城主吉良政忠が叔母弘徳院のために創建した小庵であったと伝えられる。開山は臨済宗の僧馬堂昌誉で、創建当初の寺号を弘徳院といたした。天正12年（1584）、曹洞宗の僧侶門菴宗関が住職に就き、曹洞宗に改宗された。

寛永10年（1633）に世田谷領の15ヶ村（後に20ヶ村）が江戸屋敷賄料として彦根藩に与えられると、彦根藩主井伊家の菩提寺となった。藩主井伊直孝の没後、その長女、掃雲院とその母春光院によって伽藍が整備され、寺号も直孝の法名「久昌院殿豪徳天英居士」に因み、「豪徳寺」と改められた。

◆◆山門◆◆

一間一戸の四脚門で、切妻造・銅板葺きで両脇に袖塀をつける。基壇は石垣積である。「旧山門」は明治7～9年に除去され、明治17（1884）年に上棟された。その後関東大震災により大破したが、昭和初期に再建され、今日に至っている。

◆◆鐘楼◆◆

延宝7年（1679）に近江大掾（だいじょう）藤原正次、通称釜六によって制作された。施主は井伊直孝の長女・亀姫（掃雲院）で、豪徳寺第4世天極秀道和尚による銘文には深く仏法に帰依していた掃雲院が、父直孝の冥福のため豪徳寺に多くの浄財を寄進し伽藍の造営を行ったことが記されている。桁行一間（9.5尺）、梁行一間宝形造で銅板瓦棒葺き、基壇は石垣積。

◆◆仏殿◆◆

豪徳寺伽藍の中心的な建物で、延宝5年（1677）に建立された。仏殿を寄進した掃雲院が黄檗僧に帰依していた影響から、黄檗宗の建築様式が随所に見られる。また板状の絵様肘木は他の黄檗系寺院でもあまり例を見ない珍しいものである。仏殿は掃雲院が藩主直澄の菩提を弔うために造ったものである。正面桁行柱間5間（実長58.6尺）、側面梁行柱間6間（実長52.2尺）、一重裳階付き、入母屋造り、新舎及び裳階屋根を瓦棒銅板葺きとする。基壇は石垣積。昭和57（1982）年から続けられた調査によって土蔵から仏殿の棟札が発見された。豪徳寺は宝永元（1704）年に火災にあっているが、仏殿は被災を免れたと考えられている。しかしながら数度の修築がなされて、かなりの部分が後世のものである。

◆◆招福殿◆◆

豪徳寺は招き猫ゆかりの地で、彦根藩2代目の藩主であった井伊直孝が、豪徳寺の前を通りかかると、門の前で手招きする猫に導かれて雷雨の害から逃れられたという話が伝わっている。今では境内の招福観音堂に大小沢山の招き猫が納められている。

◆◆忠誠公神道碑◆◆

明治38（1905）年12月に井伊直弼の嫡子直憲の遺徳をしのんで建立された碑である。直憲の弟直安の篆額。書は彦根藩出身の有名な書家日下部鳴鶴（東作は本名）。直憲は直弼と側室里和との間の子で、父直弼の死によって12歳で彦根藩最後の藩主となった。明治17年には伯爵となっている。なお「忠誠公」とは直憲の戒名からきている。撰文は、元彦根藩士谷鉄臣。碑文の添削を行ったのが、二松学舎の創立者中島中洲である。

◆◆鳴鶴日下部先生碑銘◆◆

昭和8年10月建立の碑。西園寺公望の篆額。日下部鳴鶴（1838～1922）は明治・大正を代表する書家である。彦根藩士田中総右衛門に次男で、のち日下部家の養子になる。本名東作。明治2（1869）年太政官の大書記となり、三条実美・大久保利通の知遇を受けたが、明治11年利通の死にあい、以後は書に専心した。明治13年中国から楊守敬が来日したのを機に巖谷一之らと金石の学をひらく。明治24年中国にわたり、漢・六朝の書を骨子とした書法を究めた。ことに漢隸の正統を伝えた作例は一格をなし、明治・大正期にかけて盛んになり、多くの門下を輩出した。

◆◆高橋瑞子彰功の碑◆◆

昭和8（1933）年に建立。女性医師の先駆者高橋瑞子の功績をしのんで建てられた。高橋瑞子は嘉永5（1852）年愛知県に生まれている。若くして医学を志したが、女性には門戸が開かれず、産婆学校で学んだ後ようやく済生学舎という男子のみの医学校に入学することが認められて36歳にして医師免許をとることができたという。

◆◆井伊家墓所◆◆

境内一角を占める井伊家の墓所には、井伊直孝をはじめとして、江戸藩邸で亡くなった藩主やその家族の墓がある。

桜田門外の変で亡くなった井伊直弼の墓および殉死者八名の霊を祀った「桜田殉難八士之碑」や、主君直弼の墓守としてその後半生をささげた忠臣遠藤謙道の墓などもある。

平成21（2009）年から同22（2010）年にかけて井伊直弼ほか三基の墓の改修を工事が行われた。この工事に伴う調査の結果、直弼の墓には、石室・石槨がないことが判明している。



☆桜田殉難八士之碑

桜田門外の変で亡くなった者4人、重傷を負いそれがもとでなくなった者4人を祀る。明治19（1886）年3月建立。

☆遠城謙道墓

遠藤謙道（文政6（1823）年～明治34（1901）年）は、彦根藩鉄砲足軽で、主君井伊直弼横死後の幕府による彦根藩追罰に憤り、老中井上正直に書を呈するなど、藩の救済に奔走するも果たせず、慶応元（1865）年隠居して出家した。以来37年間、豪徳寺の直弼墓畔に暮らし、その掃苔に余生を過ごした。藩はその忠義に報いるため、二人扶持を給し、直弼遺愛の茶室をその住まいとして与えた。

◆◆勝光院◆◆

宗派は曹洞宗、山号は延命山。『新編武蔵風土記稿』によると、その昔は浄土宗金谿山龍鳳寺と称したが、その後興善寺と改めた。建武二年の頃、吉良治家の法名興善寺殿月山清光大居士と言う、この人を開基とする説があるが、これは誤りであるとしている。開山は吟峯公禪師、この禪師は文和3年（1354）5月7日に死去、その後天文15年（1546）吉良頼康を中興開基とした。頼康の法名は勝光院殿脱山浄森居士。頼康は永禄4年12月15日卒。頼康の子氏朝は天正元年曹洞宗の天永琳達禪師を招聘、同派の開祖としたこの時、頼康の法名勝光院を寺名とした。氏朝の子頼久（吉良から蒔田に改称）以降は勝光院が一族の墓所となった。

◆◆世田谷吉良氏◆◆

吉良氏は足利氏の支族で、三河国幡豆郡吉良荘より起こった。世田谷吉良氏は、室町時代初期に陸奥管領をつとめた奥州吉良氏の後裔で、治家のとき世田谷に本拠をかまえたといわれる。世田谷吉良氏の歴史については不明な点が多いが、戦国期の吉良氏は「太田道灌状」などにあらわれる。文明年間（1469～87）に成高は太田道灌と結び数度の合戦に及んだようであり、蒔田（横浜市南区）にも居館を構えた。その後、小田原北条氏の勢力が広まると、頼康は北条氏綱の女を室とし、その支配下に入る。1560年頃には、頼康の家臣団はほとんどが北条氏直属となり、名門の吉良氏は名目的存在にすぎなくなった。豊臣秀吉の「小田原征伐」（1590年）が行われた際、当主の氏朝は下総国に逃れており、世田谷城は抵抗もなく落城した。北条氏滅亡後、世田谷吉良氏は徳川氏に従い、江戸時代には幕府旗本として上総国長柄郡寺崎郷に領地を与えられた。1701（元禄14）年の赤穂浪士の一件により吉良上野介の家（西条吉良氏）が断絶したので、この蒔田氏が高家を継ぐことになった。

◆◆世田谷城跡◆◆

烏山川の舌状台地に築かれた中世の城郭跡。現在、世田谷城址公園として保存されている部分と隣接する豪徳寺の境内も含まれる。二つの曲輪（廓）の間には大きな空堀がめぐり、主廓の西側には空堀に沿って土塁が作られており、豪徳寺参道からも土塁の一部を眺めることができる。

城主は清和源氏・足利氏の流れに発する吉良氏の庶流で、室町時代に奥州管領として、斯波氏との勢力争いに敗れた吉良治家が、14世紀後半頃、鎌倉公方足利基氏から領地としてこの武蔵国世田谷郷の地を与えられたという。それ以後、吉良氏は当地に居館を築いて本拠地とし、「世田谷吉良殿」「せたがや殿」などと称された。鎌倉鶴ヶ岡八幡宮には、永和2（1376）年に治家から世田谷郷内の上弦巻半分を寄付するという寄進状が残されている。

15世紀中頃、吉良成高は太田道灌と結んだが、道灌亡き後は小田原の後北条氏に接近し、子の頼康は北条氏綱の娘さき姫（高源院）を夫人に迎えている。頼康の跡を継いだ氏朝は高源院が前夫堀越（今川）貞基との間に設けた子である。天正18（1590）年、豊臣秀吉の小田原征伐で後北条氏が滅ぼされると、氏朝も世田谷に留まることはできず、下総国生実（現千葉市）に逃れた。翌年、氏朝の子頼久が徳川家康に招かれ、上総国長柄郡寺崎村に1,125石を与えられ旗本に列し、蒔田氏を名乗った。

◆◆世田谷のボロ市◆◆

旧大山街道（大山道・矢倉沢往還）にあたる世田谷代官屋敷前の通りで、毎年12月15・16日と1月15・16日の両日にボロ市が開かれる。起源は、北条氏政が世田谷新宿での六斎市（一と六の日の月に6回開く）を、1578（天正6）に楽市として認めたことからだといわれている。当時の世田谷は、下総・江戸方面と小田原方面の中間宿として栄えていた。しかし北条氏が滅び、徳川氏が江戸に入府すると六斎市は廃れ、農具類や古着・正月用品などを商う年末1回の歳市（としのいち）となった。明治になって太陽暦が用いられると1月に初市が開かれて年2回となる。特に日清戦後、野良着や草鞋などの補修用のボロが集められ売買されたので、ボロ市の名が付けられたという。最盛期には2,000店を数え、見世物小屋・芝居小屋も出た。現在では約500mの間に屋台が並び、開催日には20万人以上の人出が見込まれるという。

◆◆世田谷代官屋敷◆◆

世田谷代官屋敷は、江戸中期以後、彦根藩世田谷領20カ村の代官を世襲した大場家の住居で、大場代官屋敷とも呼ばれている。大名領の代官屋敷としては都内唯一のもので、現存する主屋と表門は、記録から元文2（1737）年のものと考えられている。江戸時代中期の上層民家の旧態をよく残した貴重な建造物であることから、昭和27（1952）年に都史跡に指定されていたが、昭和53（1978）年には住宅建造物として国の重要文化財の指定を受けた。

大場家は、桓武平氏の末流である大庭景親の子孫と伝えられ、大庭氏滅亡

後、三河に逃れ、そこで吉良氏に仕え、吉良氏東下とともに世田谷に定住したといわれている。天正18（1590）年の吉良氏没落後は世田谷にとどまり帰農した。しかし、寛永10（1633）年に彦根藩主井伊直孝が江戸屋敷の賄料として世田谷領15カ村（のち20ヶ村）を賜ったときに、大場氏は代官に命じられ、それ以後代々代官職を勤めることとなった。本家3代目の六兵衛盛長が15歳（20歳で死去）と若かったため分家の市之丞吉隆が代官を勤めた。その後、本家六兵衛家は上町の名主と問屋役を勤め、世田谷郷一帯に大きな影響力を持った。1739（元文4）年に7代目代官大場市之丞某が年貢未納（横領）の為、田畑屋敷没収の上追放となるとこれに代わり本家7代目六兵衛盛政が代官となり、1820（文政3）年まで相役に飯田・荒居氏が就く代官二人体制がとられた。1753（宝暦3）年、盛政は役向き専用に書院座敷を増築し、母屋にも改修を加えている。1830（文政13）年、10代目弥十郎景運（遠江国出身、10代目興弘の未亡人に婿入り）は40年にわたる功績が評価されて一代限り歩行の士分に取り立てられた。正規の彦根藩士と認められたのである。彼の養子として11代目となった隼之助景長（10代目興弘の長男）の時、代々歩行の士分を継ぐことが認められている。

彦根藩には下野国安蘇郡佐野領17,693石余も領有しており、そちらに佐野奉行を置いていた。世田谷領2,306石余は在地の旧家大場家などを代官に命じ、これを配下として収税業務などを行わせていたのである。代官の職務は、領内年貢の取り立てが中心であるが、その他、多摩川治水、領内の治安維持など、村々の名主・年寄を指揮して行なう大変な任務であった。江戸藩邸の日常生活に必要な物資を調達して納入するのも重要な仕事であった。

代官屋敷内にある世田谷区立郷土資料館は、「世田谷区史」編纂を契機として、区内資料の収集・保存と公開を目的として昭和39（1964）に開館したものである。二千数百点の古文書があり、うち1,366点の大場家文書は都の有形文化財に指定されている。

12代目代官与一景福の妻・美佐が遺した日記がある。嫁いで三年後の1860（安政7）年から書き始め、1904（明治37）年まで続くという。桜田門外の変が起きた安政7年3月3日の日記では、まず正午頃、太子堂村の弁次郎から「御屋敷にて変事出来致し候」との知らせが入る。夕方、節句祝に屋敷に出ていた近隣の名主らが戻ってきて、藩主井伊直弼の遭難を知り（「委細御様子相わかり」）、代官景福は仕度を調べ、世田谷村名主や人足数人を連れて上屋敷へ出府している。

*参考：安藤優一郎『世田谷代官が見た幕末の江戸 日記が語るもう一つの維新』角川SSC新書、2013年発行、『大場美佐の日記 一』東京都世田谷区教育委員会、1989年発行

◆◆円光院◆◆

真言宗豊山派。世田谷吉良氏の祈願所として天正年間（1573-1591）に盛尊和尚によって創建されたと伝えられている。吉良氏が盛んであった頃は伽藍であったようだが、同氏の滅亡により衰微した。明治維新時には廃仏毀釈の影響で廃寺の危機にあうも檀家らの強い要望により再建。

* 世田谷区立桜小学校

明治12（1879）年、円光院本堂を仮校舎として、「桜学校」が設立される。同25（1892）年、「東京府荏原郡世田谷村立尋常高等小学校」。昭和16（1941）年、東京市桜国民学校。同22（1947）年、東京都世田谷区立桜小学校。

◆◆世田谷区役所◆◆

これで完成？と言われた世田谷区庁舎 戦後だった当時、コンクリ打ちっ放しを選んだ理由とは

2024年4月30日『東京新聞』より

日本モダニズム（近代）建築の旗手、前川国男（1905～86年）が設計した東京都の世田谷区第1庁舎の取り壊しが始まるのを前に、建築に関わった前川事務所出身の建築家による講演と現地見学会が4月23、25の両日に区内で開かれた。「完成から今年で約60年。60年の命だったわけですが、愛着を持っていただき、ありがとうございます」と語りかけた。（森本智之）

区庁舎はピロティと広場を中心にコンクリート打ちっ放しの複数の建物で構成される。このうち、区民会館（1959年）、第1（60年）、第2庁舎（69年）が前川の作品だが、区は老朽化を理由に、区民会館は改修、第1、第2庁舎などは建て替えることを決定。第1庁舎は大型連休明けの5月中旬に、第2庁舎は2026年9月以降に取り壊しが始まる。

○「セメントの臭いが染み付いた」

23日は、区民会館と第1庁舎を担当した奥村珪一さん（90）、第2庁舎を担当した大宇根弘司さん（82）が約30人に施工当時の思い出を披露した。コンクリートといえばモダニズム建築の代表的な素材だが、当時の日本ではまだ普及しておらず奥村さんは「試行錯誤だった」と明かし「セメントの臭いが体に染み付いちゃいましたね」と現場で格闘した当時を述懐。見慣れないコンクリート打ちっ放しの建築に対し「完成後も『これでもう完成ですか』とよく尋ねられました」と懐かしそうに振り返った。

近代以前の建築には、材料に石や木材など費用がかかる自然素材が使われ、権力や富の象徴の側面があった。20世紀に入り、コンクリや鉄、ガラスなど安価な素材の登場で建築も近代化。「人間のための建築」を志向するようになった。

○「人が集まる」民主主義の象徴に

その担い手の一人が、仏建築家ル・コルビュジエに学んだ前川だった。

日本でも戦前の公共建築は重厚で権威的な雰囲気があった。奥村さんは「世田谷区庁舎の建設は、戦後の民主主義の時代。建築は市民の方を向き、市民に提供できる空間をつくろうという意識が強かった」と話した。

「市民が集まる公共建築」の象徴が24時間誰でも自由に出入りできるピロティを敷地の中央に置いたことだろう。区民会館には完成当時、結婚式場もあった。

だが、戦後10年余の当時は「まだ食うや食わず」。建築家の意気込みの一方、予算は抑えられ、コストカットに苦労したという。第1庁舎のロビーには戦後洋画壇をリードした大沢昌助デザインの巨大レリーフをあしらったが、大沢の兄弟が前川事務所に所属した縁で、「デザイン料が払えないから無料にしてもらった」と明かした。

○利益優先の再開発に警鐘

大宇根さんは前川の代表作でやはり自身も関わった東京・丸の内線の東京海上日動ビルなど、名建築といわれた戦後の建築物が再開発で次々に壊されている点に言及。「建築は長く使い続けることで景観をつくる。建築家もそれに耐える建築を造ることが課題だったが、今のまちづくりはどうすれば利益を上げられるかがテーマになっている。いつもピカピカかもしれないが、落ち着かない街になっていくのではないかと危惧した。

主催したのは、市民団体「記憶をつなぎ人をつなぐ世田谷庁舎をのぞむ会」。メンバーの小林みどりさんは「建て替えは残念だが、実際に建築に関わった人の話を聞き、一人でもたくさんの人の記憶に残してもらえれば」と話した。

◆◆国士館大学◆◆

1917（大正6）年、創立者柴田徳次郎（1890年～1973年）をはじめとする青年有志が集まり、東京麻布区（現港区南青山）に私塾「国士館」を創立した。柴田の思想は、吉田松陰や佐倉惣五郎の影響を受けたものとされ、1919（大正8）年に世田谷の松陰神社隣接地に移転し、財団法人国士館となり、国士館高等部を設置。1946年、法人名を至徳学園と改称するが、1953年に国士館に戻し、1958年、国士館大学（体育学部）を開設。

◆◆桂太郎墓◆◆

1847（弘化4）年、萩城下に生まれる。明治維新後、陸軍に入り日清戦争には師団長として出征。1898（明治31）年に第3次伊藤博文内閣の陸軍大臣に就任。1901年、桂内閣を組閣し日露戦争を遂行した。日露戦後は西園寺公望と交代で内閣を組閣する「桂園時代」をつくったが、1913（大正2）年に憲政擁護運動の盛り上がりのために内閣総辞職をした。同年10月10日、東京の自宅で死去した。67才。



◆◆広沢真臣墓◆◆

松陰神社参道の西側にある。広沢は1833（天保4）年に萩城下に生まれた。尊王攘夷運動に従事し長州藩政の中心的指導者となる。明治維新後も政府の重要なポストを歴任し、木戸孝允とともに長州藩閥を代表する人物となる。1877（明治4）年正月9日に東京の私邸において暗殺された。39才。最初、東京芝の青松寺（毛利家の菩提寺）に埋葬されたが、後に松陰神社隣地に改葬された。

◆◆吉田松陰◆◆

1830（天保元）年、萩城下に生まれ代々山鹿流兵学師範である吉田家の養子となる。江戸に遊学するも1854（安政元）年にアメリカ船に乗りこもうとして失敗、幽閉されたのちに獄に入れられた。後に藩の許可をえて松下村塾を開いた。兵学・儒学を論じ名利のための学を否定し、国家経世の学を説いた。安政の大獄の時に江戸に移送され、1859年に刑死した。30才。



◆◆松陰神社◆◆

吉田松陰は1859（安政6）年10月27日に小塚原において処刑された。処刑後数日して長州藩士飯田正伯・伊藤俊輔らが同地の回向院に碑を建て埋葬した。1863（文久3）年、弟子の高杉晋作・伊藤らが荏原郡若林村の毛利家抱屋敷内に移し頼三樹三郎・小林民部らの遺骨とともに葬った。墓域は幕末に幕府により一度破壊されたが、明治元年、木戸孝允が修復整備した。

松陰の墓碑には「吉田寅次郎藤原矩方（のりかた）墓」と記されている。また墓の周りには栗原良蔵・同夫人、綿貫治良助、中谷正亮、野村靖・同夫人などの師弟の墓が並んでいる。

明治維新後、1882（明治15）年に門弟などが松陰神社を創建し社殿を建立し、1908年には伊藤や山県有朋などが松陰50年祭を営み、その際石の鳥居と大変立派な石燈籠30基を寄進した。

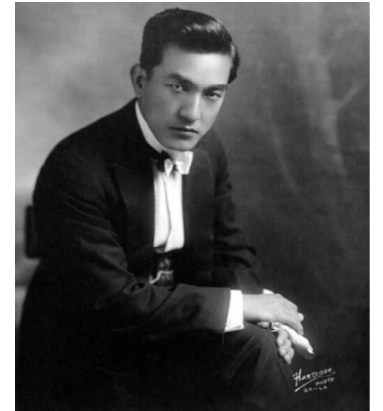
◆◆松下村塾◆◆

松下村塾は1842（天保13）年に萩城下の松本村（現山口県萩市椿東）にあった。もとは吉田松陰の叔父玉木文之進の家塾だったが、安政3年ころより松陰が事実上の主宰者になった。村塾は本来、庶民・下級士族の教育機関だったが次第に松陰を中心とした政治集団となっていった。門下からは高杉晋作・伊藤俊輔（博文）・山県小助（有朋）・などの長州藩の攘夷・倒幕運動の中心メンバーが育っていった。松陰死後、村塾は一時廃れたがのちに再興され、1892年ころまでは存続していたという。1907年に村塾域内に松陰神社が創建され、村塾ともに現在まで伝えられている。

1938（昭和13）年、吉田松陰の顕彰のため、国士館専門学校校長尾高武治が発起人となって、山口県萩市の松下村塾の模造を国士館校内に建設。建設には、建物は「景松塾」と呼ばれ、成績優秀者のための特別講義などに使用されたが、1941年に松陰神社へ寄贈・移設された。2017（平成29）年には改修工事が行われた。

◆◆早川雪洲◆◆

1889年～1973年。映画俳優。国際的なスターで、日本からの国際俳優の先駆者。千葉県生まれ。1909年渡米。「神の怒り」（1914）でデビューし、サイレント初期のアメリカ映画に主演。性的魅力でアメリカ女性を魅惑して人気スターになった。トーキー以後は性格俳優として国際的に活躍し、デビッド・リーン監督「戦場にかける橋」（1957）の日本人の捕虜収容所長の役で有名。女優青木鶴子と結婚して共演作も多い。松陰神社隣地の墓地に二人で眠っている。



◆◆昭和女子大学恩師同窓の墓◆◆

昭和女子大学は創立者人見圓吉（1883～1974、詩人、ペンネーム人見東明）を中心として組織された文化懇談会に端を発し、1920（大正9）年9月に新しい日本文化の創造と人類福祉の増進に自ら進んで貢献する女性の育成という教育目標を掲げ、現在の文京区に日本女子高等学院として設立された。その後、中野区上高田に校舎を移転し、1940（昭和15）年、創立20周年の記念事業として、人見圓吉が「恩師の墓」、1944（昭和18）年に「同窓の墓」を校舎近くの清原寺に建立した。戦後、校舎を世田谷に移転し、1961年に「恩師の墓」と「同窓の墓」が世田谷キャンパスの近くにある松陰神社境内の霊園に改葬された。毎年11月には世田谷区若林にある松陰神社で、恩師同窓の合祀慰霊祭が行われる。

あなたも京浜歴科研へ

京浜歴史科学研究会は、京浜地域に生まれた歴史を科学する、市民・学生・教育者・研究者などの共同の集いです。地域の歴史に関心をお持ちの方、歴史を科学的に学ぼうとなさっている方、是非ご入会下さい。

「神奈川県史」を学ぶ会

□大正昭和編

毎月1回、原則として第一土曜日午後3時から5時まで、横浜市野毛地区センターにおいて、近代史料を読んでいます。現在は横浜開港資料館蔵『佐久間権蔵日記』の原文書を読み、横浜近郊についての学習に取り組んでいます。近代史料は読みやすいので史料に接しなれていない方でも大丈夫です。資料はこちらで全て用意してありますので、筆記道具だけでお出かけ下さい。

□幕末開港編

毎月1回、原則として第一土曜日午後6時30分から8時30分まで、横浜市野毛地区センター（JR桜木町駅徒歩10分）において、現在は『新横須賀市史』資料編近世Ⅱを読み、海防期の浦賀近辺の学習を行っています。

『京浜歴科研会報』

毎月25日に発行し、会員にお送りしています。研究会の記録・史料紹介・書評・投稿などを載せ、会と会員のパイプ役を務めています。

『京浜歴科研年報』

毎年1回発行しています。会員の論文、シンポジウムの記録等を掲載しています。現在36号まで刊行されています。

「歴史を歩く会」

研究会の学習をもとに原則として春と秋の2回「歴史を歩く会」を行います。足と目で歴史をさぐり、歴史のイメージを豊かにする会です。

「集中研究会」

毎年春・夏2回、研究上必要な主要文献を読んだり、歴史理論などの学習を行う会です。

単行本

京浜歴史科学研究会編『近代京浜社会の形成』岩田書院、2004年12月刊、4000円＋税

【連絡先】 〒233-0006 横浜市港南区芹が谷5-59-12 ^{おおこ}大湖賢一方
京浜歴史科学研究会事務局
TEL・FAX 045-825-3736
Eメール oogo@mvj.biglobe.ne.jp
HP <http://keihin-rekika.org>